

研修会を終えて

@部会員所感

講義より

「教化」とは「我々の生活を確かめることだ」との一例として葬儀を取り上げられていた。近年は直葬が増えているが、葬儀には残された者が学んでいくことが多くある。死に向き合う中で、「人生とはやり直しがきかないものだ」という覚悟をもち、自分自身と向き合うことができる。これこそが「教化」であるということを学ばせていただいた。

恵信尼が留守職と名告られたのは、ご門徒の留守を守ることでであると教えていただき、住職も門徒であり、共に教える場がお寺であると改めて確認させていただいた。また、ご門徒も住職や坊守、僧侶に期待することなく、自分たちのお寺であるという自覚のもと、共にお寺を護持し、聞法の場を開くことが願われていると教えて頂いた。

部会で話し合いながらもなかなか自分の中でじっくりくるものがなくて、、、で、今回の研修会に突入しました。誉田さんは「教化とは」生活を確かめる、自分の生活に学び・気付くことではないかと言われた事が改めて考えさせられました。学校での勉強と一緒に知識を得ることが目的ということに慣れてしまっていて、それが人間の学びだとみんな思っている。それが小さい時から刷り込まれていて、私もその感覚で研修会など企画し参加してしまっている。そして、教える人がいて教わる人がいるという上下関係の学びになってしまっているのかなと思います。本当の人間の学びで大切なことは教えから自分を知り、自分の生活に学ぶという事なんだと思います。これは誰でもできます。教えと生活と一緒に考えられるような語り合いの場が作れたらいいなあと思います。

共同というのは、ともにひとしくということ。教化というのは、生活を学ぶ、たしかめるということ。問いのある暮らしを取り戻すのが教化活動。「共同教化」というのは、人生をゆたかなものにしていこうという手段だと。

結果が教化になるのではなく、教化を造り上げていく過程にこそ共同、共にということが大切になるのではないかと、この事が胸に残っている。この感覚は、それぞれの場所で今の時代に教化の場を生み出す時に持っているべき感覚であると思う。

日々の教化の現場で話し合われることの少ない話題が、実は「教化について」であった。このことが知らされたことは、教区・地区・組にとっては問題点の提起であるだろうし、これから最初に手を付けられる、身近な課題だと改めて思う。教区改編など有り、今後の展開は予想し難いが、どんな状態になるにせよ、この「教化について」話し合うことから初めて行くことの大事さを確認できたと思う。

座談より

昔ながらの仏事が保てなくなる危機感の中、組長が中心になり葬儀についての学びの場を持ち、僧俗ともに仏事に理解を深める機会を持ったり、問法の機会を組内で持つため公共の建物を使用する話などがいただけた。

各組の話聞きながら、様々な問題は何も真宗大谷派だけが抱えている問題ではないということ考えた。少子問題はまさに後継者不足の一因であり、都会への一極集中は人口こそ多くても実はつながりの薄い社会が形成されていること、現在街中の組や寺院が抱えている問題であろう。我々の活動が、地域の活性化、ひいては国の再生につながっていくのだと大きな夢を見てもいいのではないかと考えさせられた。

横のつながりや帰属意識が薄い中での教化活動の展開へのご苦労について、だから駄目だというのではなく、それでもより良くしていきたいというお話をされていた。葬儀屋との交渉や組内住職へのアンケート等のお話が興味深かった。

少子高齢化の為に、お寺の行事のみならず、地域の行事の存続もままならない状況、後継者が生み出されない状況、そしてその事を課題としながらもお寺を道場としてつなげていきたいという熱意を感じた。新たに地域に流入してきた人達が自治会活動に消極的で、関係を持つことに苦労されている話、人口が増えるからといってお寺にお参りが増えることとは全く関係がないということ、

墓じまいという事案が増え、お墓を厄介な後始末と考える世代とのやりとりに苦心されている話のなかで、お寺に対する敬う感覚がないに等しいと嘆かれている話が印象に残っている。

ご住職がおられないお寺をご門徒が当番制でお守りをしていて、報恩講も勤めておられるところもある。近隣の組の事情もお互いによくご存じの様子が印象的でした。

過疎化がすすんでいるということでしたが、いまだできることをと熱心に活動されているようでした。人数制限をすると役員のみになり、女性が少なくなる(=女性の役員が少ない)ことを課題にあげておられたことが印象的でした。